

努力の人、筆の人

斎藤勇先生を送る

岩 山 太次郎

中世英文学の権威、斎藤勇先生は、新制度の同志社大学ではいつも先頭を歩んでこられた。先生が旧制度の大学予科を修了されたのは1948年で、それは日本の大学が新制度に変わる年であった。この年、先生は新制大学となった同志社大学文学部英文学科の初めての学生として3年に入学されたのである。1950年3月、新制大学は最初の卒業生を送り出した。斎藤先生はその中の一人である。新制度としては初の文学士である。さらにできたばかりの新制度の大学院文学研究科英文学専攻修士課程に進まれた。入学者は10名であったそうだが、そのうちの3名が2年後の1952年3月に、日本の大学に「修士」という学位ができて初めての文学修士の学位を受領された。もちろん斎藤先生はそのうちのお一人である。1954年4月に大学院英文学専攻に博士課程が設置されると、その第一回目の入学者として、博士課程に進まれ、1964年2月27日、英文学専攻の課程博士第1号の文学博士(同志社大学)になられた。受領された博士学位は「甲第2号」である。(ちなみに「甲第1号」はその2年前の工学博士である。「乙」はいわゆる論文博士に付せられる記号である。)斎藤先生の学位請求論文は“A Study of Piers Plowman”(のちに南雲堂より出版された*A Study of Piers Plowman with Special Reference to the Pardon Scene of the Visio*となるもの)であった。

学部の卒業論文の対象として取上げられたのがチヨースー、大学院の修士論文ではスペンサー、博士論文がラングランド。こう書けば、時代を遡行しながら英文学研究を深められただけのように見えるが、そう簡単なことでは

ない。慎重にして、血の滲む努力の日々の中で、取組む対象を見極められて
 いったのことであつたと思われる。「…大学の文学部の門をたたいていたわけ
 である。そこでは文学が学問として取扱われようというのだ。そこではもは
 や主観批評は許されなかった。鑑賞の代りに研究が要請された。出来る限り
 最大量の知識、出来る限り最大量の検証。そしてひたすら作品をうみ出した
 作家を識る事に専心しなければならなかった。」これは先生が学部4年次生の
 ときに書かれた文章である。（「回顧一年」, *L.L.L.* No.25 (1949年7月1日))。
 爾来50年近く、先生はこれを実践してこられたのである。しかも慎重を胸と
 してである。「生涯の自分の仕事が決定的ようになった頃から…意識して、
 努力して、慎重な態度をとっている分野があります。一つは交叉点の横断、
 もう一つは、自分の研究であります。一つは、自分の生命にかかわるからで
 あります…一応自他ともに許しているわたしの研究分野は中世英文学であり、
 これがまた、現在では、解説の労を必要とする古い英語でかかれております
 関係上、人一倍読書に時間がかかり、ぜったい、といつてよいほど、急いで
 はことをしそんずる、のであります…同僚たちが、一日の読書量を、何十頁、
 何百頁、と誇りあっている時、わたしは、ただだまって、それを羨ましそう
 にききながら、心の中で『ボクは一日、何十行だ』と繰り返していました。」
 （「人、われを粗忽者とよぶ」, *L.L.L.* No.52 (1964年7月5日))。ここに「甲
 第2号」の秘訣があつたのである。

斎藤先生の研究者としての慎重さと努力が生んだ成果が見事なものである
 ことは、衆人の認めるところである。それはお名前の標記の変化にもみられ
 る。わが国の英文学界で「斎藤勇」という名前はかつてはあの大御所勇(た
 けし)先生だけだつた。中世英文学界では、ことは変つていった。斎藤勇先
 生は早くから(いさむ)というルビが不必要な学者として人は認めはじめた
 のであつた。権威勇(たけし)先生の方が、晩年には(たけし)とルビを付
 されたほどである。

斎藤先生は教育者としても卓越したものをもっておられる。先生は大学院

修士課程を終えられるとただちに、1952年4月に同志社大学短期大学部の助手に就任された。誕生日が3月25日でおありだから、まだ24歳と1週間ほどの若さでの就任である。翌年4月には文学部助手に就任された。その後、専任講師、助教授を経て、1966年4月に、38歳になられたばかりという若さで、教授に就任されたのである。翌年には大学院文学研究科修士課程教授に、博士課程教授に就任されたのは1970年であった。42歳のときだった。このように助手ご就任以来、47年の長きにわたって、同志社大学文学部英文学科で、また大学院で、教育にあたってこられた。とりわけ中世英文学の分野では、斎藤先生の恩師、故上野直蔵先生の第一のお弟子さんとして、同志社中世英文学の「顔」であったことは衆目の一致するところである。

学界でのご活躍にも目を見張るものがある。当然、中世英文学関係が中心である。1964年、「中世英文学研究会」の設立に尽力され、また「中世英文学談話会」にも入会された。「日本中世英語英文学会」では評議員を長く勤められているし、とりわけ1987年から2年間、その会長の要職にあられた。「日本英文学会」でも、長年にわたり『英文学研究』の編集委員として、また、評議員として、同志社大学を代表してこられた。「同志社大学英文学会」でも副会長を8年間、会長を8年間にわたり勤められ、われわれの学会をまとめ、引張って下さった。まさに文字通り、同志社英文学の「顔」であった。

このような斎藤先生のご業績はすべて先生の日々たゆまぬ努力のたまものであった、とわたしは考えている。

わたしは斎藤先生を「筆の人」とも表題にかかげた。どんな文体もあれば自由になし、驚くほどの豊富な語いで意を表明できる人はめったにいない。漢籍の素養のないわたしなどは明治の文人の書き物ぐらいでしかお目にかかったことのないようなムツカシイ言葉を、先生は自由に操り、機関銃のように矢継ぎ早に、次から次と、素早く、しかもすらすらと達筆で、欲しいままにできる稀な才能の持主である。そんな斎藤先生であるから、ご研究の成果の発表も実に活発で多数である。ご著書には先きの学位論文をはじめ、

『中世のイギリス文学——聖書との接点を求めて——』(1978年, 南雲堂), 『カンタベリ物語——中世の滑稽・卑俗・悔悛』(1984年, 中央公論社), 『イギリス中世文学における聖と俗』(1990年, 世界思想社) など, 編著の『チョーサーとキリスト教』(1984年, 学書房) や『中世イギリス文学と説教』(1987年, 学書房) など多数の学術書でわが国の中世英文学研究の先頭を走ってこられた。また, 『人文学』, *Doshisha Literature*, 『主流』, 『同志社大学英語英文学研究』といった学内の研究誌や「日本英文学会」の *Studies in English Literature*, 『英語青年』などへの寄稿の学術論文は枚挙にいとまがないほどである。これまた, 先生の努力が可能にしたことである。

一般の人々への中世英文学の啓蒙にも先生は熱心である。該博な知識と緻密な研究に裏打ちされた軽妙な文体による「中公新書」の『カンタベリ物語』は, 門外漢のわたしなどには, チョーサーの面白さを味いながら, 償罪の巡礼を寝ころびながらさせてくれる, 実に楽しい読物であった。ご自分の研究だけでなく, このように人を誘う魔力とも言うべき才能があればこそ, 多くの門下生が生れたのであろう。なかにはすでに中世英文学界で重きをなしている方も多数おられる。先生の還暦を祝って編纂された『中世英文学への巡礼の道』の執筆者の顔ぶれを見れば, 若き日に斎藤先生の薫陶を受けて, 今日, 学界で注目されている人の多さに驚かざるをえない。

こういう斎藤先生が英文学科を去られるのは誠に残念である。が, ご定年とあらばいたし方ない。まだまだお書きになる研究成果は沢山蓄えておられる様子だし, 仕残しておられる研究もありと聞く。今後は, あの斎藤節の名文でわれわれをご指導下さい。近年お体を少しこわしておられるが, ご自分のためにはもちろんですが, われわれを指導下さるためにも, アルコール料とカロリー摂取料の計算と実行には「自信あり」とご自慢の健康管理を徹底され, お元気でご研究を続けて下さい。わたしは, 先生が助手にご就任されたときから, ということは学生の頃から, 親しくいろいろご指導いただいた。それへの感謝の適当な言葉がないほど, 長く, 多くを教えていただい

た。本当に有難うございました。繊細すぎるほどの心配性の先生、いささか早とちりされることもある先生、徳照館廊下での日課の定刻散歩と咳払い——みんな思い出になってしまうのは残念である。しかしご定年には、お祝いを申し上げなければならない。お目出とうございます。実に複雑な気持ちである。